

<原著論文>

## 古典の不連続と連続

Discontinuity and continuity in classical Japanese Literature

原 雅子<sup>1</sup>

### 要 旨

古典文学は新たな文学の典拠として援用され、時に飛躍転換し姿を変え文学として人を魅了する。古典は連続しつつ不連続に様々なジャンルの文学の中に糸を紡いできているといえる。古典文学と古典語を生かした現代絵画、現代の歌を掲げ底流に在る古典との意味を追求するものである。

キーワード：竹取物語、伊勢物語、吉川霊華、永田和宏

The tale of TAKETORI, The tale of ISE, Reika Kikkawa, Kazuhiro Nagata

### はじめに

わが国初の歌集『萬葉集』の最終歌は天平宝字三年（七五九）である。歌の歴史は営々と今日まで一二五〇年以上に渡り紡がれてきている。歌が日本人の心に遺伝子として汲み込まれてきた歴史の、経緯と一端を古典から現代への不連続と連続というかたちで考えてみたい。古典から近現代の文学や芸術は重層構造をなしながら形成されていく。古典はものを考える基盤であり、典拠として引用されたり、飛び越えて新たな転換を生じることも有り得る。古典を基盤にジャンルの重層や解釈がより新たな魅力を引出し作り、附加していく。

—

奈良時代の萬葉集巻末部の歌八百年後半から、「鳴くよウグイス平安京」と語呂合わせで唱えている七九四年（延暦一三）の平安遷都は日本文化の幕開けとなる。そして遷都から丁度百年を経た八九四年（寛平六）に中国唐に派遣されていた遣唐使は廃止される。遣唐使の往来したこの百年間は漢詩漢文集や詩論書が多く制作され中国風が羽ぶりをきかせ、唐風謳歌時代とも国風暗黒時代といわれる。この時期を過ぎて、中国漢字を借り漢字を崩した字体の平仮名や漢字の一部を使う片仮名の発明は日本文

化を加速するのに相応しいものとなる。

国風文化の重視の気運とともに、平仮名、片仮名が普及し自由に使いこなせるようになり、公の場では漢文を使用している男性たちも女性との恋のやりとりや自分たちの心情を自由に平仮名によって表わすことが日常では行われるようになる。天皇を始めとする貴族、僧侶たちは和歌を平仮名で表現し心を表現共有できる手段として日常で使うことが当たり前となった。

平仮名は漢字に比べて一字一字画数が少なく書き易い。滑らかな曲線の多い平仮名は続けて書き易く連綿体となる。美しく繊細な料紙に散らし書きも含め美しさや雅を求め、書写や文学の表現に使用されていく。平仮名は覚え易くかつ筆写が早く出来る利点がある。男性は公式の文書や日記に漢字を使っていたが女性は平仮名を使う。ゆえに漢字は男手、平仮名は女手と称されるようになる。

平仮名の普及は連綿で早く書け、流れる美を醸し出すのに適しており、仮名文学の誕生や雅の探求を加速し得た。仮名文学から女流文学の発展へ大河の流れは大きくうねりをなしながらどんどん新たな文学形成をなす機動力となり、自然の流れを形成して行くのである。

紀貫之の土佐日記はみづからを女性の立場に置き女手と称された仮名文で著わしたことは衆知である。貫之は平仮名を自在に操り自己の内面を見つめ

1 Masako HARA

千里金蘭大学生生活科学部児童学科

受理日：2013年10月15日

査読付

る自照文学として日記文学を確立している。

かくして、ほぼ九百年ころ物語初の竹取物語、歌物語の伊勢物語、勅撰和歌集初の九〇五年（延喜五）古今和歌集といった各ジャンルを代表するわが国初の文学が競いあうように著わされる。さらに百年経た丁度千年頃に源氏物語が著述された。平安時代は中古とも呼ばれ、平仮名により日本を代表する作品を誕生させた目覚ましい時代である。

## 二

平安時代の古典文学を題材とした現代の美術および詠歌二例は、現代に生かされて現代に繋がっている。

まず一例として、日本古典文学をわが土壌に取り込んでいる、わが国の近代美術の画家の例をみてみる。吉川霊華である。一八七五年（明治八）生れで一九二九年（昭和四）五十一歳で没している。「不盡神霊」（一九二七年、株式会社ヤマタネ蔵）は淡彩で不盡神を中央に背景に富士山、右に十二単衣坐姿のかぐや姫、左に衣冠束帯坐姿の在原業平が描写されている。これは群馬県高崎市タワー美術館に寄託されているものである。



霊華の絵では竹取物語の最後の場面富士山との関連と伊勢物語の東下りの段との関連が一枚の国風の絵に描写され、ひとつの解釈を作りあげている。日本古典文学を題材にかぐや姫と業平が同時に表現されるというほかに例を見ない日本画を描き出している。日本古典文学を同一土壌に乗せた面白い解釈である。

具体的に記すと、霊華は日本画の一幅に、中央に立像の霊神は大きく慈悲溢れ神々しく描かき、富士

山は背景の奥に小さく遠景に描いている。その霊神の左右には在原業平とかぐや姫が両者とも坐像で小さく仕立てられ描写される。霊神は中央に掲げ三像の描写と見てもよいであろうし、あくまでも業平とかぐや姫は霊神に仕える御供の像と見てもよいかもしれない。一幅の絵、この同じ土俵の上に、日本古典文学作品の二作品から、主人公を登場させる視点は意外性があり非常に新鮮であった。画から深い感動が呼覚まされたことは確かである。

図録「吉川霊華展—近代にうまれた線の探求」は繊細な線の図を堪能させてくれる（東京国立近代美術館、二〇一二年六月一二日刊行）。霊華は自己の一思想を「正しき伝統の理想は復古であると同時に未来である。そこには進歩があり、光明がある。」という。古典の伝統と未来への道を目指すところに、霊華の着地点が見て取れる。古典散策と古典を単に紹介するだけでなく、古典を通じて今と未来へ重層的に深く詠歌ひとつにしても、繋いでいけたらとわたくしは考えているゆえに、霊華のこの思想は琴線に響くものとして紹介したく考えた。

日本特有の文化が形成されていく平安時代や、さらに古く遡った中国に影響を受けた古典文学や宗教あるいは中国の古説話を一幅の絵に表現していった人物がいる。近代に生まれた線の探求日本画と評される。細線を駆使し繊細美の中に凜とした雰囲気や題材を描き切っていく。題材に新鮮味溢れる眼差しを注ぎ繊細な清い品格を漂わせている日本画である。三〇年前の一九八〇年代には霊華の展覧会が開催されたとのことであった。ところがその日本画を見る機会すら失われ存在が希薄になりつつあり、ゆくえが危惧されていた。

霊華の存在の希薄、消失を懸念して、復帰保存を目指し国立近代美術館、タワー美術館の関係者が中心となって二〇一二年に霊華を再び世に出す準備をし、霊華公開の実現の運びになったという。

霊華は様々な古典文学作品からヒントを得て、ジャンルや時代を越え、新たな再生を日本画に描くことを通して生み出した。わたくしは霊華が日本古典文学作品を題材として活かして繊細な線で描いた絵の内に潜む力強さに感動させられている。

## 三

霊華の日本の古典文学に対する眼差しは独自の世界である。日本画家にとっては画題をもとに何を描

くかであり、意味を追求し題材を選択している。霊華は伝奇物語の竹取物語と歌物語の伊勢物語を同じ土俵上に乗せ一幅の日本画を描いた。富士の山は霊峰として背後に描写され、信仰の対象でもある麗々しい富士山が景を彩っている。

富士山は二〇一三年（平成二五）六月二二日、第三七回世界遺産委員会においてユネスコの世界文化遺産に正式に登録されると発表された。富士山は信仰の対象であり、四四km離れている歌枕の三保ノ松原も含む景観美が評価された。

古典文学の世界では竹取物語の末尾で、月の人であるかぐや姫は帝からの求愛に不死の薬を差し上げる。帝はかぐや姫の居ない世で永久に生きることなどは無用であると富士山頂でその薬を焼却してしまう。その煙は、当時富士山が噴火しておることと符合しているという。竹取物語の末尾部分に次のように記し、

逢ふことも浮かぶ我が身には死なぬ薬も何にかはせむ

かの奉れる不死の薬の壺に、御文具して御使に賜はす。勅使には、調の岩笠といふ人を召して、駿河の國にあなる山の頂に持て行くべきよし仰せ給ふ。嶺にてすべきやう教へさせ給ふ。御文不死の薬の壺竝べて、火をつけてもやすべきよし仰せ給ふ。そのよし承りて、兵士ども数多具して山へ登りけるよりなむ、その山をばふじの山とは名づけける。その煙、未だ雲の中へ立ち昇るとぞいひ傳へたる。

と、切実な感慨を美しく表現されている。古典文章を音読すれば情景がまぶたに浮かぶのではなかろうか。

江戸時代中期にも富士山の噴火は上田秋成などによっても書き記されている。文献から活火山ゆえのマグマの変動も研究され、現代も科学的にどんどん地下が動いている研究も発表されている。さまざまな姿をわれわれに見せてくれる富士山の美や信仰はどの時代の人々をも捉えて離さないと思う。また、葛飾北斎の富嶽三十六景も見ごたえがあるが、近代の吉川霊華も異なった視点から古典文学作品を材にとり解釈を施した日本画も秀逸であり、魅了されるものである。

国文学の文学史をかえりみるに伝奇物語は竹取物語、宇津保物語、落窪物語などが続出し、かたや歌物語は伊勢物語、大和物語、平中物語などが後続している。伝奇は伝奇、歌物語は歌物語と、ジャンル

で分かり易く縦割りにまず見ていく。そして伝奇物語と歌物語の両方の流れが交じり合い複雑な源氏物語といった大部な物語の構成の作品として作りあげられていったのだという説明がなされる。中国文学の大部な枠組みや人物造型や構成などの影響が説かれるといった具合である。

霊華の絵は美術絵画の世界において構築された面白い発想の、さらにいえば奇想天外なものといえなくはない。このように何を切り取っていくか、自由な発想の多様性が古典の文学作品を違う視点から観る可能性を気附かせてくれている。別の専門分野からの異なった発想は新たな世界を構築し得る可能性があり実現してみせてくれた。中古から近代へ跳んで、わたくしとしては道草をしながらこの古典散策を考え進めている。

日本の古典文学作品から多く題材を採り、感動を与えてくれる繊細な清冽な絵である。背景にある和歌が亦、生かされ美しい平仮名の連綿体で書かれている。

古典の和歌の伝統は近代の日本画家の霊華にも継承されていた。霊華は日本の古典文学との関係を日本画に表出し近代から現代へ、古典を生かして今に継承された成功の人物として紹介している。

#### 四

霊華に加え、歌一首「透明な秋の光にそよぎゐし段戸檻樓菊だんどぼろぎく」（永田和宏氏）を古典との連続不連続として挙げてみたい。

氏が表現する歌において、現代短歌は現代語で表現していたが、それでは治まり切れないものを感じ現代歌を詠ずるにあたり、古典の詞の使用も可能であると古典に回帰されたと著述中に記されている。どうしても現代語だけでは表現できないニュアンスなどを感じられた結果、古典表記使用も認め実践されている。言葉の不連続と連続ということになる。

わたくし自身古語で表現するニュアンスや語彙は韻律を整える上で捨て難いと感じている。古語を今も使用している。わたくしは現代語で詠めないニュアンスは古語も使用しながら現代歌として出詠する。歌会で日本で使用されていた言葉を生かし言葉を繋いでいくことが必要であろう。

二〇一二年（平成二四）の上記の歌に、古語を使われて「そよぎゐし」と詠まれた。科学者は野の花の名前を突き止め歌にされた。野でよく目にするが



名前は知らなかった花である。図鑑で調べると漢字表記の段戸檻樓菊とある。一般に段戸檻樓菊と記されていても判読はかなわぬのではないかと、漢字表現について平仮名表記を重ねられた。この手法は当歌以外には使えないであろう。

わたくしはこの歌を見た時、初句二句が秋の透明感を実に鋭く捉えているとの印象を受けた。次に段戸檻樓菊の漢字を萬葉仮名風にいち字いち音で読んだ。するとだんだんぼろぎくと読めた。そして最終句の平仮名でだんだんぼろぎくを仮名を振るように重ねたのだと作者の意図が分った。

だんだんぼろぎくの花をわたくし自身も植物図鑑で確認し、名前のいかめしさから、道端や野原に咲くかわいい地味な小さな花と知った。そこで、なあんだそうかという気にさせられ、思わず微笑んでしまった歌である。遊びがあり同時に科学者の追求せざるを得ない科学者癖になんとか同感し、頭にこの歌を入れた。

秋の空気澄む野に光は乱射し散乱する中にだんだんぼろぎくなる野の花は光にそよいでいたという存在感が詠われて在る。科学者がまずその花に目をとめ秋の光の中にいて次には名を調べ上げ一生忘れない名前と確認して居る。漢字は大仰だなと感じたに違いない。漢字だけの表記ではこの歌の読者は分り難いだろうとの啓蒙的な観点からわれわれに平仮名を添えて知らせてくれ共有させてくれている。この科学者は理科系ながら著述から学生時代、国文学者佐竹昭広らの薫陶を十分授かり古典の面白さを知っている。ゆえに著述のなかに時に古典和歌の修辞を否定しない、むしろうまく使いこなすことを推奨する文章に出くわす。

著述の全編に目をまだ通せていないので、科学者の言いたい大事なところが抜けているかもしれない。その点は容赦願うとして、わたくしが霊華とともに敢えて引いた理由は爰にある。つまり現代の詠歌においても言葉は日本語として今に続いている。歴史の一瞬に、今生きている。ゆえに古語であれ古典的な発想であれ、それらを否定する必要はないのではないかと考えている。

わたくしは現代短歌とはなにかと問いかけ考えている。己を考える糧にしてみよう。切実な今に情を語る。ただ俳句のように季語は考えなくてよい。みそひともじ三十一字だから、俳句よりは二倍弱多く表現が可能である。

わたくしはそれらに加えて、みそひと文字に古典

和歌表現のように、序詞、掛詞、枕詞など修辞法を駆使すれば意味が裏表、重層的に表現が可能であると考えている。

詠歌の歴史は国文学の世界に脈々と研究され、さらには一般には現代人も「みそひと文字」を、一例を挙げれば各結社や歌会始において歌を詠むという営為は享受されている。ひたすら独詠されている例もある。

わたくしは自分が携わってきた国文学や国文の文化、歴史に関わると同時に存続と伝統を継承していくことに腐心の念は深い。この思いから題材もおのずとそのような詠歌を提出するが多い。わたくし自身、今関わっていることや興味深い歴史文化を現代を通して、詠んでおきたいと考えている。他詠の方向とは少し異なるかもしれない。先蹤の方々先輩などから御指摘を頂戴し共有でき分かる歌を提出したく、そのようになれば幸甚である。古典散策の序ながら古典から現代へと橋渡しになっていればと考えるものである。

日本の古典文学への学びは文部科学省が学習指導要領でうたっているように小学校も授業で詩、俳句、和歌などを学び古典を学ばせ、中学校高校校でも、もちろん授業で古典を学んでいる。

大学で感受性の鋭敏な時期に日本古典文学を再勉強することは意味があると考えている。そのような学生にわたくしは今、接している。昔かれらが日本の古典文学で感じていた、古典文法は厄介だとか、といったこととは違う発見をする。今までとは違う感じ方の自分を発見してくれている。飛躍し深い考えをしてくれる学生が増えている。現場にいて学生自身がそのことを経験している。

日本の古典は馴染むと美しく感じ、楽しく読めるようになる。わたくし自身、国文学科から教育系の学生と日本の古典文学や近現代文学等を音読し、筆写や筆述を授業で実施している。学生は最初感じなかった欲びから飛躍転換していく。その過程で自信が育まれ楽しみを感じて、さまざまな新たな発見をしてくれる学生が増えてきている。次の世代を担う学生がいい教えを、またその次の世代に伝えていってくれるだろう。

学生のみならず様々な出会いや縁により言葉に嗜む交わりを心から願うわたくしのみそひと文字への思いも深い。

古典と現代は連続と不連続で循環するものであるとわたくしは考えている。

## 五

霊華のモチーフは日本古典文学の解釈がなされている。たとえば「香具耶姫昇天 竹取物語」（一九二〇年、個人蔵）は彩色で、天からの迎えの天女四人、童女一人の持つ香炉からは細く薄い天に棚引く「煙」があがり繊細である。雲下に十二単衣立ち姿のかぐや姫が両手をかざして、いかにも繊細な「透ける羽衣」を持参した天女のひとりから受取ろうとしているような構図がある。

霊華の別の日本画「樹下巫女画」には題を「樹下美人の屏風をよめる」とし二首の次の和歌を詠んでいる。

ものいはゝなにしかあるらむさくはなのにはほへるかことありしむかしか

このもとにたてるをとめにくれなるの頬にほやかにものいはんとす

物を言えば何か起るだろう、咲く花の匂うがごとき有りし昔か。あるいは此の木の下に立っている乙女の紅の頬はつややかで美しくまさにものを言おうとしている、という若い美人を和歌で詠んでいる。あるいは、

ひとりぬるやまとりののをのしたりをにしもをきまよふたにのつきかけ

において歌枕を背景に詠んでおり、和歌が芸術世界の奥の深さを語り聴かせるものになっている。霊華世界に日本画に古典和歌を構築し、古代世界を表現した。

竹取物語が日本初の物語とは、源氏物語の絵合わせの巻に「竹取物語はくいでき初めの親」と紫式部が記していることを文学史的な証とする。

源氏物語、絵合の巻の「中宮のお前の物語絵合せ」に次のように記す。左と右に分かれ各々が提出する物語を競い合う遊びである。

まづ、物語の出で来ははじめの<sup>おや</sup>祖なる竹取の翁に宇津保の俊蔭を合はせてあらそふ。「なよ竹の世々に古りにけること、をかしきふしもなけれど、かくや姫のこの世の濁りにもけがれず、はるかに思ひのほれる契り高く、神代のことなめれば、あさはかなる女、目及ばぬならむかし」と言ふ。右は、かくや姫ののほりけむ雲居はげに及ばぬことなれば、誰も知りがたし。この世の契りは竹のなかに結びければ、下れる人のことこそは見ゆめれ。ひとつ家の内は照らしけめど、百敷のかしこき御光にはならばずなりにけ

り。阿倍のおほしが千々の黄金を捨てて、火鼠の思ひ片時に消えたるも、いとあへなし。車持の親王の、まことの蓬萊の深き心も知りながら、いつはりて玉の枝に疵をつけたるをあやまちとなす。絵は巨勢の相覧、手は紀の貫之書けり。絵は紙屋紙に唐の綺をばいして、赤紫の表紙、紫檀の軸、世の常のよそひなり。

俊蔭は、はげしき波風におほほれ、知らぬ国に放たれしかど、なほさして行きけるかたの心ざしもかなひて、つひに人の朝廷にもわが国にもありがたき才のほどを広め、名を残しける古き心を言ふに、絵のさまも、唐土と日ノ本とを取り並べて、おもしろきことどもなほ並びなしと言ふ。白き色紙、青き表紙、黄なる玉の軸なり。絵は常則、手は道風なれば、今めかしうをかしげに、目もかかやくまで見ゆ。また左にそのことわりなし。

（『源氏物語』三、新潮日本古典集成。校注者石田穰二、清水好子、昭和五三年五月一〇日発行）

円熟し歌合など二作品を闘わせ勝敗を決定する遊びながら歌論などを生む原動力となるものである。竹取物語と宇津保物語を伝奇物語という同ジャンルで絵合わせにおいて争わせている。「物語の出で来はじめの祖なる竹取の翁」とこれによって証とするのである。紫式部は古めかしく、をかしきこともないといいつつ、かぐや姫が天上人で汚れない姫で現世のあさはかなる女はとても到らぬと紫式部の意識が窺える。当時藤原家は摂関家として絶大な権力を有し天皇家に娘を送り込み、その個人教師の役割をしていた紫式部からすれば人間社会の現実と神代の乖離を記している。

竹取物語が内包する純粋な人間的な涙を最後に帝からの求愛に対し届けた格高い表現は心の真実を描き切っており、日本初の文学作品として掲げるに相応しいものであったといえる。わたくしたちに感動を与える最初の物語としての地歩は深い意味がある。虚構における真実を汲みとる紫式部の炯眼は式部の文学論を現わしているともいえ、注目されるところである。

物語初に和歌はどのような役割を果たして出るのであろうか。主人公かぐや姫が婿難譚題における箇所と和歌のやり取りがなされ、最後の締め括りは帝からの求婚に和歌の応答で締め括られて終わっている。作者は神仙思想、竹取説話、羽衣伝説など民間伝承を虚構物語として構築したのは漢文学の才能

に秀でた源融のような男性であると推定されているのである。が、注目したいのは平仮名で物語を書き、和歌が応答歌として嵌め込まれていることである。

女性への恋の想いが平仮名で和歌として認められ相手に届けられる。その状況が竹取物語に記され、その当時和歌は枝や文挟みにはさみ、遣いの者に文を届けさせていたことが知られる。

作り花の枝につけて、かぐや姫の家にもて来見せれば、

(仏の御石の鉢、石つくりの皇子の話)

この玉の枝に文ぞつきたりける。

(蓬萊の玉の枝、くらもちの皇子の話)

文挟みに文をはさみて申、歌よみ加へて持ちて いましたり。

(火鼠の皮袋、あべの右大臣の話)

いとよはき心に、頭もたげて、人に紙を持たせて、苦しき心ちにからうじて書き給、

(燕の子安貝、いそのかみの中納言の話)

かぐや姫の御もとにぞ、御文を書きて通はせ給。御返りさすがに憎からず聞え交し給て、おもしろく、本草につけても御歌をよみてつかはす。

(御門の求婚)

かの奉る不死の薬に、又、壺俱して、御使に賜はす。

(ふじの山)

和歌を記した文を枝や文挟みにつけて遣いの者が用を足して、相手からの返歌を携えまた主人のもとに手紙を持ち参上するのである。かぐや姫は「人」すなわち女性として苦悩しながら行動している。恋の対象となる貴重な場面で、自己の身分を最後に打ち明かすのであるが、婚期をひかえた女性として造型されている。物語の最後に人にあらず、月から来たという意外な展開、結論に導かれていく。

貴公子たちに難問を投掛ける時などは、直截な表現で語り切込まれている。竹取物語の作者と同等の知識をもった物知りの女性として貴公子たちが太刀打ちできない人物として造型されている。しかし誰もが結婚したいと切望するほどの美しい女性で、人間世界にはいない天女として造型される。帝の耳に噂は達し、帝に相応しい女性として天女という人間を越えた造型に伝奇物語としての意味がある。文学として伝奇を越えかぐや姫は喜怒哀楽を備えた人間的な感情で話は展開し文学性を際立たせているといえ

る。

いずれも幻想的内容ではあるが、人間的真實を語る涙を誘うものである。歌の応答が物語の主要な場面の貴重な表現になっており、相手に自分の切なる想いをなんとか届ける手段であった。

物語の各場面を歌や応答歌は、物語を求心的に引締める役割を果たす状況を醸したと考えられる。伝奇物語の中での和歌は効果的であり、次のジャンルの伊勢物語など情を扱う日本文学における物語においてはさらに和歌が核として重要性を強調する。それを認識させるに相応しい成功を竹取物語は果たして提示してくれた。物語においても歌重視の一つの方向を示したのではないかといえる。

チベットにも竹取の話はあり、日本の各地に伝説や伝承があり、古く萬葉集三七九一番長歌、反歌二首三七九二番・三七九三番、三七九四～三八〇二番は萬葉仮名で異伝の形で竹取の翁の話であった。ここでは塙書房『萬葉集』訳文篇（佐竹昭広・木下正俊・児島憲之共著）を使用し読み易くした。

#### 三七九一番 詞書

昔、老翁（おきな）有り、号（よびな）を竹取の翁といふ。この翁、季春の月に、丘に登り遠く望む。忽ちに羹（あつもの）を煮る九箇（このたり）の女子に逢ひぬ。百の嬌（こび）は儔（たぐひ）無く、花の容（かほ）は匹（たぐひ）無し。ここに娘子等、老翁を呼び嗤（わら）ひて曰く、叔父来れ、この燭火を吹け、といふ。ここに翁唯々（をを）といひて、漸（やうや）く趨き徐（おもふる）に行き、座上にきぬ。良久（ややひさ）にして、娘子等皆共に咲（ゑ）みを含（ふふ）み、相推譲（あひゆづ）りて曰く、阿誰（たれ）かこの翁を呼びつると。すなはち竹取の翁謝（かしこ）まりて曰く、非慮（おもはざ）る外に、偶（たまさか）に神仙に逢ひぬ。迷惑（まと）ふ心、敢へて禁（とど）むる所無し。近づき狎れぬる罪は、希（こひねが）はくは贖（あか）ふに歌を以（もち）てせむと。即（すなは）ち作る歌一首 并（あは）せて短歌

#### 三七九一番長歌

みどり子の 若子髪（みづこがみ）には たちし 母に懐（むだ）かえ 榎襖（ひむつき）の平生（はふこ）髪には 木綿肩衣（ゆふかたぎぬ） 純裏（ひつら）に縫（ぬ）ひ着（き） 頸付（うなつき）の 童髪（わらはがみ）には 結



ひ幡（はた）の 袖付け衣 着し我を にほひ  
よる 児（こ）らが同年児（よち）には 蟻  
の腸 か黒し髪を ま櫛もち ここに搔き垂  
れ 取り束ね 上げて巻きみ 解き乱り 童  
になし

さ丹つかふ 色なつかしき 紫の 大綾の  
衣 墨江の 遠里小野の 真榛もち（後略）

萬葉集の詞書に竹取の翁と称される老人は九人の若い美女に呼ばれ赴く。翁は偶然に天女と出会い近づき狎れぬる罪を犯しそこで歌で贖うと、長歌返歌が続く。が、かぐや姫のごとき人物造型はここにはない。竹取の翁と神仙の娘子九人との一時的出逢いである。和歌から物語へという画期的な文学史上の発展を促す萌芽が萬葉集にみられるという最新の研究があり、注目したい。

萬葉集研究において、歌から物語への移行に二人称詠歌が出現していたことが発想の転換に寄与しているという指摘がなされている。萬葉集歌の「笠女郎が大伴宿禰家持に贈る歌二十四首」（巻第四、五八七～六一〇）に物語への萌芽が在るという。

八世紀後半である。二人称の萌芽が見られ、物語化に移行していくとされる（小川靖彦「願はくはわれ春風に身をなして——佐佐木信綱の萬葉学における「評釈」〔『萬葉集選釈』と『新月』〕——」、青山学院大学文学部『紀要』第五十三号（二〇一一）抜刷、二〇一二年三月一日発行）。

上記の萬葉集の長い詞書や長歌返歌も種として参考にされたかもしれない。竹取物語は構成のしっかりした物語であり中国小説の構成を援用したと考えられる。

時代を経て竹取物語は子ども向けに「かぐや姫」の話としてかぐや姫の恋の部分が削除され分り易く改変し子ども層に普及し児童文学としても地歩を中世には築くに到る。

## 六

竹取物語は物語の祖として伝奇小説に属するジャンルである。ほぼ九世紀に並び立つ伊勢物語は歌物語のジャンルに属する。伝藤原定家自筆本天福本伊勢物語は信用されたテキストである。定家自筆本を三條西実隆が臨写したといわれ歌学研究の人物が関与した本である。伊勢物語は伝写本が多く信用のおける定家自筆本に戻す研究がなされている。

天福本奥書に

みやび みやびか也といふ詞、其心、みやびを  
かはすなどいふは  
なさけといふ同心事歟。

と藤原定家の詞が記され、伊勢物語の本質を一言でいえば、みやび、なさけに集約されると記す。

竹取同様、伊勢物語の作者も不明である。主人公の在原業平に仮託して考える説もあるが、当時作者名を記さないのが当たり前であった。

書写段階で書写者がどんどん自分なりの感想や意見を書き加えたり、また改変されることもあって、諸本が広がり伝本の数は増える結果となり、原伊勢物語の成立、すなわち凡そ九百年頃から諸伝本が作られていった。

「ふじの山」を記した第九段、東下りの段を引く。

むかし、をとこありけり。そのをとこ、身をやうなき物に思ひなして、「京にはあらじ。あづまの方にすむべきくにもとめに」とて、ゆきけり。もとより友とする人ひとりふたりしていきけり。みちしれる人もなくて、まどひいきけり。みかはのくに、やつはしといふ所にいたりぬ。そこをやつはしといひけるは、水ゆく河のくもでなれば、はしをやつわたせるによりてやつはしといひける。そのさはに、かきつばたいとおもしろくさきたり。それを見て、ある人のいはく、「かきつばたといふいつもじをくのかみにすゑて、たびの心をよめ」といひければ、よめる。

から衣きつつなれにしつましあればはるばるきぬるたびをしぞ思ふ

とよめりければ、みな人、かれいひのうへになみだおとしてほとびにけり。

ゆきゆきて、するがのくににいたりぬ。うつの山にいたりて、わがいらむとするみちは、いとくろうほそきに、つた・かへではしげり、物心ほそく、すずろなるめを見ることと思ふに、す行舎にあひたり。

「かかるみちは、いかでかいまする」といふを見れば、見しひとなりけり。「京にその人の御もとに」とて、ふみかきて、つく。

するがなるうつの山べのうつつにもゆめにも人にあはぬなりけり

ふじの山を見れば、さ月のつごもりに、雪いといろふれり。

時しらぬ山はふじのねいつとてかかのこまだらにゆきのふるらん

その山は、ここにたとへば、ひえの山をはたちばかりかさねあげたらんほどして、なりはしほじりのやうになんありける。

東下りで京の比叡山と富士山を比べて歌枕を詠んでいる。霊華が富士山と業平を伊勢物語の第九段を引き、竹取物語の最末尾のかぐや姫と天皇とのやりとりで葉を富士山で燃やす箇所、富士山が出てきているのである。竹取物語の天女の伝奇性に対し、伊勢物語は歌中心の人間の物語となっておりジャンルの違いが明らかである。しかし霊華は一幅の、違和感のない日本画に描いていたことは評価されてよい。

歌物語の業平は文学の主人公として和歌を物語の展開軸に据えて実に巧みで和歌を物語中に詠み、その美しさ巧みさによって人々を酔わせる歌人であった。

和歌から物語、物語から和歌への往還が、和歌の詞書が、物語を形成していく例が諸本からうまれた研究は深い。伊勢物語から古今和歌集に採択された例などに挙げられた丹念な研究も多い。

日本文学において和歌が物語に欠くことのできないものとなってきたことを提示してくれている。竹取物語が成立した当初の和歌と物語の地の文との関係を遙かに越えて、伊勢物語では地の文と和歌が両者、主張をもって作用しているとみることができる。

流布本は一二五段から成り、各段に和歌は一首以上必ず入れられている。全部で二〇九首の和歌が詠まれ、歌物語といわれる所以である。

## 七

わが国において古今和歌集（九〇五年成立）、伊勢物語（九〇〇年～九五〇年頃成立）、源氏物語（一〇〇〇～一〇〇二頃成立）の三作品はことに古典の中では人々に好まれ、愛読されてきた。伊勢物語の歌は歌物語として枕詞的な旅日記、さらに業平の地位から現代以上に、京都以外の他の領地や国を知る旅も「身をやうなきものにして」と蠟化されながら文学として和歌を中心に雅びな心を内包した作品として愛されている。

在原業平の一代伝記ながら歌が核となり物語は後代に影響を与え今も輝いている。伊勢物語は和歌を学ぶ人々の愛読書として読まれた書物であった。書写され伝本も第一次、二次、三次と享受附加されて

いったという（片桐洋一『伊勢物語の研究（資料編）（研究編）』）。

江戸時代初期、俳聖松尾芭蕉は旅日記奥の細道を著わした。先蹤となっている。江戸中期の和歌中興の租、冷泉為村の母五十回忌手向けへの旅行、京から摂津国への近場ながらの旅日記ともなり、「道行き」文でもあり、それを想起する（拙著『冷泉為村と摂津富田本照寺』二〇〇一年三月三十一日発行、自照社出版刊行）。

伊勢物語の歌物語としての意味を今さらながらに非常に深いものがあると認識するものである。

伊勢物語の成立、作者は不明である。一二五段に在原業平が登場し主役であると同時に一代記として一貫しているとみなされてよい。業平は尊卑文分脈によると桓武天皇の孫阿保親王の子である。皇族の一人として歌の才にたけ、歌物語として各段は心に響く話が綴られる。伊勢物語では「つつみつのゐづつにかけしまろがたけすぎにけらしなないも見ざるまに」筒井筒の段、「かすがのわかむらさきのすり衣しのぶのみだれかぎりしられず」初冠段、「うらわかみねよげに見ゆるわか草をひとのむすばむことをしぞ思ふ」四九段、「さ月まつ花たちばなのかをかけばむかしの人のそでのかぞする」六〇段、「世の中にたえてさくらのなかりせばはるの心はのどけからまし ちればこそいとどさくらはめでたけれうき世になにかひさしかるべき」八二段、「ちはやぶる神世もきかずたつたかはからくれなゐに水くくるとは」一〇六段、「つひにゆくみちとはかねてききしかどきのふけふとはおもはざりしを」一二五段は病気で辞世の歌とされる。業平一代記とみれば一貫した業平の行状が記される。

古今和歌集六歌仙の一人としての在原業平への評は

その心余りて言葉たらず。しばめる花の色なくて、にほひ残れるがごとし。

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして

と記される。雅びを体現した業平を、情感が溢れた態を現わしているといえる。

業平が一流の歌よみで、特定歌人から象徴的な男へ脱皮し変貌し歌物語へ成長する背景にはパトロンとしての源融左大臣の塩釜の段と、業平の経験の混合を考える説もある（渡辺実「伊勢物語」新潮日本集成）。古典の諸営為を深く汲み今後とも学び考えていきたい。現代に古典の歴史文学が大きく裏付けと



なり重層化してくれるものである。

拙稿は歌に関わる諸相の歴史が不連続に連続に連動し生きていることを目的として国文学歴史の視点が中心になっている。

わたくしは歌の一首一首が芸術であり、各個人の生き位置による表現が人に共感されるか、ひいてはなんらかの感動を自分と共通してもらえるかに腐心の念があり歴史文化文学の不連続連続の中にあって生きて在ることを有難く考えるものである。歌は芸術である。キャンバスに何を描きどのような色を使うか、その人のほとぼり出るものこそ大事にしたい。

## まとめ

### 近現代歌人

目を通してきた一部の歌人の名前を挙げさせていただく。

佐佐木信綱  
山川登美子  
石川啄木  
齋藤史  
若山牧水  
北原白秋  
齋藤茂吉  
高安国世  
宮沢賢治  
塚本邦雄  
釈迢空  
安田章生  
前川佐美雄  
与謝野晶子  
山崎雪子  
河野裕子  
佐藤佐太郎  
馬場あき子  
佐佐木幸綱  
安田純生  
岡野弘彦  
岡井隆  
永田和宏

拙稿に一人歌の用例を出させて戴いた。唐突な一人ではなく、わたくしが小さい頃から馴染んできた多くの近現代歌人の歌集があり、その重層的な歴史の

用例の内の一首として捉えていただければと考えて附記いたします。

## 参考文献 一部紹介

小島憲之『上代日本文学と中国文学』1965年  
『佐竹昭広集』5巻, 岩波書店, 2009-2010年  
片桐洋一『伊勢物語の研究 研究篇』明治書院, 1968年  
片桐洋一『伊勢物語の研究 資料篇』明治書院, 1969年  
三輪正胤『歌学秘伝の研究』風間書房, 1994年  
日下幸男『近世古今伝授史の研究』地下篇, 新典社, 1998年  
久松潜一, 實方清編『日本歌人講座 第五巻 近世の歌人』弘文堂, 1969年  
『日野龍夫著作集』4巻, ペリかん社, 2005年  
『萬葉集 本文篇』『萬葉集 訳文篇』『萬葉集 各句索引』塙書房  
『近世歌文集 上』松野陽一, 上野洋三校注者, 新日本古典文学大系, 1996年  
『竹取物語』日本古典文学大系, 新日本古典文学大系, 新潮日本古典集成  
『源氏物語』日本古典文学大系, 新日本古典文学大系, 新潮日本古典集成  
『萬葉集』21代勅撰和歌集, 西行, 和泉式部など

